

農家の移つりかわり

全農連技術顧問

黒川 計

上野から常盤電車で40分余、そこから私鉄で約1時間、関東平野の真中に私の故郷がある。

最も近い山は筑波山で、東北方25Kくらいあり、山に生えている木は見えず、ただ青く見えるだけである。次に近くに見えるのが日光の連山で、男体山がひときわ高く真白に見える。空気の澄んだ秋から冬の天気の良い日は、西の方に富士山が小さく見える。

日本一広い関東平野の真中で、4～5年前までは、東京に出るにも汽車に乗っている時間だけで2時間半くらいかかった。

5～6年前までは農業の主体は、稲作と養蚕であり、1部で野菜、養豚、酪農が行われていた。農業だけで暮らしを立てていた農家も、20戸のうち8戸くらいはあった。耕作面積は大体2h前後のものである。この専業農家のうち1戸を除いて全部が、稲と養蚕を主体としたものであった。

しかし、この10年間生活は向上し続け、テレビは白黒がカラーに、電気洗濯機も電気冷蔵庫も各戸に配置され、車はオートバイから乗用車に変わり、ほかに小型トラックも持つようになった。

薪炭だけの燃料がプロパン主体に変わり、井戸水は水道、来客接待用の茶菓子も、漬物からせんべいやお菓子に変わった。団体旅行も多くなった。

農業労働も手と人力の農業から、まず小型の農機具に変わったが、最近はそれら小型機の買換期に当たり、50～60馬力の大型耕耘機の共同利用方式に変わってきている。

刈取も手刈から機械刈りに変わってきた。しかしこの間、農協が構造改善事業で買入れた大型の外国産コンバインは、大きすぎるうえロスも大きいので、あまり利用されずに眠っているようだ。

稚苗機械田植機も、ここ2～3年急に入ってきた。ただ育苗条件がきびしいので、なにごととも大まかにやってきた農家にはなかなか大変なようで、失敗するものが年々少なくなっていくようだ。

幼児を幼稚園に入れられない家はなくなった。農家だけ入れないという訳には、いかなくなっていく。今までは、義務教育だけしかやらなかった家でも、みな高等学校に入れるようになった。

このようにして、生活費は急速にかかるようになった。農業をやるにも農機具の負担が大きくなった。

この間、農産物価格はそれほど上らず、農業収入はあまり伸びていない。

反面、機械を使うようになって手間が省け、稲作などは、移植すれば収穫まで、老人でもやっていけるようになった。麦は作っても値が安くてとても引合わないので、作付しなくなった。

最近は列車の便もよくなったし、車も持ったりで、東京にも楽に通動できるようになった。工場も東京までの間にたくさんできた。

労働賃金も急に高くなり、1日当り2,000円～3,000円になった。外で働く人達は農繁期の2～3カ月農業をやれば連続して働けるようになった。嫁さんたちも、近くの工場に働きに出ている。

専業農家である家は、農業を中心に親夫婦、息子夫婦と孫達で固い家族を形づくってきた。それが、息子が外に出て働く、次いで嫁が外で働くとなると、息子夫婦の立場が強くなり、次第に核家族化の方向に変わってくる。息子夫婦の収入の中から、親にどれだけ金を入れるかで、親子の間がしっくりいかないことが多くなった。

親の方では、食糧は負担してやってるし、孫達の面倒もみているんだから、もう少し多く負担して呉れてもよい筈だと思うし、息子の方からみれば、農業の方も、骨の折れる重労働の部門では、出稼ぎを止めて働いているんだから、あまり出す必要はないものと考えている。

このような成行を経て、専業農家から兼業農家になるにつれて、1戸の農家の中に、親と子の2つの家族ができようとしている。この傾向は兼業の度合いが強まり、第一種兼業から第二種兼業になるなど強まってくるようである。

農外収入に主として依存するようになると、息子の力はますます強くなり、親は息子の面倒になるという形になるようである。

この極端までいった型が、都市否農家の親子関係といえよう。